

劇 あ そ び の 指 導



村 井 ト ミ

昨年私共の園で、かって子供達と遊んだ劇あそび等を皆で持ちよって「幼児の劇あそび集」(二十四編)をつくってみた。そしてこの紙上に八月号を振り出しに、その中の五つ程を各々の実際の指導について解説し紹介してきたのであるが、紙面の都合もありここで劇あそびのまとめをすることになった。

それぞれの材料のとり上げ方や、年令に応じた指導の順序に違いはあるけれど、根本の指導については一貫したものがあられるわけであるし、根本のものをよく理解していればどんな場合にも、子供達と一緒に新しい劇あそびを創り出すことも出来るので、「劇あそびの指導をどのようにしたらよいか」という事について、一般的に考えてみることにする。

指導の目標をどこにおくか

劇あそびというと、とかく「ゆうぎ会」などの為に、先ず役者を決めて脚本のセリフを空覚えに覚えこませ、大がかりな衣裳をつけて一さわぎをする所も少なくないといっている。これでは全く根本の精神に反し、目標のおき場を間違えていると言わばきである。そこで目標として一応頭に置く

ことを挙げてみよう。

* 子供達が劇あそびに興味を持ち、皆で協同してたのしく遊べること。

* 特定の役者を決めずに誰でもどの役になってもなつて自由に交替して遊べるようになること。

* 子供達が音楽によって自由に表現して踊ったり、思いのままに発言、発表しあつて、劇の構成やセリフのやりとりを考えさせ、豊かな表現力と創意性をうながすこと。

* 正しい言葉や正しい発音で話させること
* 他人の前で恥しがらずによく聞えるように発表すること。

* 他人の発表にも興味をもって楽しみ、静かに聞いたり見たりすること。

* 劇に必要なお面や小道具を準備することにより楽しみながら製作の目的を果すことも出来、劇あそびの興味を一層深めることなど。

取材のしかた

取材については一応次にあげることごとくが考えられるが、いずれにしても子供達と共に考え、子供達と共につくり上げていくことには変りはない。

次に取材のしかたの例をあげてみると、

* 或る童話を元にして子供達と先生と協力して考え乍らつくっていく場合。

(子供達の知っている浦島や舌切などの昔話でも、新しくきかせた童話でも)

* 子供達の日頃の生活や、自由あそび、ごっこ遊びの中から材料をとって劇としてまとめる場合。

(例えば、ままと、幼稚園ごっこ、動物園ごっこ等)

* 季節や年中行事など或る題を先に決めておいてつくっていく場合

(例えば春に目ざめる木の芽、花の芽、秋落ちる木の葉等の自然を取り上げた、雛まつりの頃に「おひなさま」という題で、クリスマススの頃に「サンタクロース」という題をきめて劇をつくるというように)

* 既成の脚本を使ってする場合

既に出てくる脚本集などから使いたい場合は、脚本を直接子供達に覚えこませたり、すべてその通りに与えるのではなく、劇あそびをつくっていく上の、先生のヒント、参考として使う程度にし、それぞれの年令や地域の子供達に適したものを、子供達自身に考えさせ、引き出し

てやるように導くことが一番大切である。

指導の方法

一概に指導の方法といっても、三才と五才では違う点もあるから、ここでは五才を標準として、三、四才については必要な点だけ説明を加えることにする。

* 先ず子供達と話し合をして、どんなものを登場させるかについて考えさせる。例えば童話が元になっているような場合はその筋を追って考えていけばよいし、クリスマス等のように、一つの題を先にきめてする時はサンタクロースの持っている玩具をどんなものにするかを考えさせる。子供達はよるこんでお人形、電車、まり、等と次々に自分の希望のものをあげてくれる。話し合で既に子供達の頭の中に夢が出来てくる。

* 配役を決めたりするのは一番最後にして、話し合に出てきた人でも動物でも、花でもその一つ一つについて皆で(組全体)音楽に合わせて自由に表現して遊ぶ。最初はセリフはまだ使わず、先生がそれらしい適当な曲を用意したり、適当なものがない時にはそれらしく即興で弾いて

やる。

生活経験からのもの、例えば幼稚園ごっこのように日頃の遊びから取材した場合でも、やはりはじめは曲のみの表現からはいった方がよいようだ。

* 次には登場する順序を追ってやはり組全体が同時に同じ一つの役をして遊ぶ。

* こうして筋を追って一つ一つの表現をしている間に、先生が解説を入れてあげる。例えば「サンタクロースのおじいさんが大きな袋をかかいて子供達のところへやってきました」と言って曲を弾いてやると、子供達はすっかりその気持になつて動作する。

* このように遊んでいる間に、子供達の間から自然に必要上、簡単な言葉が交されるのでその機会をのがさず取り上げて、
○ ○ さんはいい事を考えましたよ等と言え、他の子供もはり切つて次々と考えるようになる。先生は、これらの言葉をメモしておくことが大切だと思う。私の園のように養成所の生徒が実習に来るような所では、はじめから記録をとつてもらうとよい。

* セリフが必要な所は「ここで何と言ったらいいでしょう」とか「兎さんが言つて

いるのに、何とか返事をしないとおかしいわね」というように相談したりヒントを与えたりしながら作っていく。

五才なら何か一言ずつでも一人で言う機会をつくってやりたいし、四才なら三四人同じ役で同時に言わせるようにすると、皆気おくれしないで言える。三才はむしろ言葉より音楽で動く方が主な位でよいし、ここにもよく年齢差があらわれている。

*次には自分のなりたい役を選んでする。一人しか必要でないサンタクローズが十人いても十五人いてもかまわずに、自分のやりたい役を充分に満喫させる。

*最後に配役の相談をする。一つの役に希望者が多い時にはジャンケンをしたり、くじ引をしたりして決める。又は皆で「誰にしていたらいいかしら」と相談する。案外○○さんが背が高くて下度きりんの役がいいとか、やさしいから山羊の役がいいよ等とあっさり決めてくれることもある。

しばらく遊んだら役を交替してあそぶ先生の方から適当らしい子供に役を割当てたりしない。

*この頃になると子供達の方から自然に

「お面をつくりたい」と言いだすので、自分の役のお面をつくらせる。何の強制もされずに、子供達は顔を輝かせて、あっという間に造ってしまふ。五才児ならお面の修理や片づけ等も子供達でさせるとよい。三才なら先生がつくって与えたり、四才なら外の輪かくだけ画いてあげれば、自分達で塗ったり切ったりしてつくることが又たのしく出来ると思ふ、又、四才、三才と年少程もつと早くからお面をあたえた方が効果的である。

*お面をつけて配役もきめて大体劇が出来上っていくと、一寸した小道具や背景が必要な時がでてくる。こんな時には子供の要求に応じて準備した方がよいが、あまり服装や小道具にこらさず、簡単な窓とか草木などで感じを出すようにする。

*こうして遊んでいる間に自然に、小さい声では皆に聞えない、人にきこえるようにはっきり話す態度等の指導をする。

*あまり練習しすぎるとセリフの言い方や動作に一つのくせのようなものが出て面白くないのでその点考えなければならぬと思ふ。

このように一つの劇が出来上っていくの

であるが、子供達も熱心に自分の役や、他の人のセリフまで考えたり、ここをこうした方がよいと言うように提案するようになってくる。そこで先生の大切な役は、いかに適当な音楽を入れて充分にその雰囲気をかもし出すかということにある。いい曲をあげなければ熱心な子供達に対して申訳ない気がする。

適当な曲がない時には、色々と作曲してみても（作曲というの大げさだがそれらしい曲に弾いてみて）よさそうだと思うのを五線紙にとっておく。この点一苦心がいる。

しかしこうして、子供と先生が一体になって苦労(?)をすることが又たのしく、どちらも希望にみちた顔で登壇するのである。

重ねて私が言いたいのは、大がかりに見せる為の劇あそびでなく子供達の創意の盛れたものを、子供達の身のまわりにころがっているものからどんどん取材して、もっと数多く遊ばせてやりたいということである。

(お茶の水大附属幼稚園)